

ヴァンパイアはなぜ腐らないのか — ヴァンパイアをめぐる 1730 年代ドイツ語圏の学説 —

森 口 大 地

1. はじめに — 二大ヴァンパイア事件

ヴァンパイア¹に所縁の深い土地としては、一般的には東欧、あるいは南欧が想起されるであろう。その中でもさらに所縁の深い国はどこかと問われると、ルーマニアという答えが返ってくる可能性が高いと思われる。なぜなら、ヴァンパイアを取り扱った有名な小説である、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ (Dracula)』(1897)に登場するドラキュラ伯爵が、ルーマニアの山中奥深くに牙城を築いているからである。このドラキュラという名前はもはや固有名詞の域を超えて、ヴァンパイアを意味する普通名詞として認知されている趣さえある。しかし、ドラキュラ伯爵の登場は 19 世紀も終わりにさしかかった頃であり、それまではヴァンパイアが必ずしもルーマニアに結びつくわけではなかった。ジョン・ポリドリが執筆した『ヴァンパイア (The Vampyre)』(1819)はイギリスやギリシャを舞台とし、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの『コリントの花嫁 (Die Braut von Korinth)』(1797)は、題にあるようにギリシャのコリントで筋が展開する。現代に流布しているヴァンパイアのイメージと過去のヴァンパイアのイメージは、もちろん一致する点もあるが、大いに異なる点も見られる。その極めつきとなるのが本稿で対象となるヴァンパイアたちである。『ドラキュラ』や『コリントの花嫁』のような文学作品という創作上の話とは異なり、18 世紀前半には、本物のヴァンパイアだと騒がれ、ヨーロッパ中にその名を知られた二人の人物がいる。彼らが登場する舞台はバルカン半島西部、セルビアである。一人は 1725 年にキノロヴァという村で死亡したペーター・プロゴヨヴィッツ (Peter Plogojowitz)、もう一人は 1726 年、もしくは 1727 年にメドヴェギアという村で死亡

¹「ヴァンパイア (vampire)」は英語であり、ドイツ語では「ヴァンピーア (Vampir)」となるが、現在では主に前者が日本語で用いられているため、便宜上「ヴァンパイア」という名詞を用いる。また、一般的なイメージと異なり、ヴァンパイアは必ずしも血を吸う存在ではないため、「吸血鬼」という訳語は使用しない。なお、様々なヴァンパイアの類縁については以下を参照。Hock, Stefan: *Die Vampyrsagen und ihre Verwertung in der deutschen Litteratur*. Berlin 1900, S. 1-62; Sturm, Dieter / Völker, Klaus (Hg.): *Von denen Vampiren oder Menschensaugern*. Frankfurt am Main 1994, S. 507ff.; 平賀英一郎『吸血鬼伝承 — 「生ける死体」の民俗学』中央公論新社 2000 年。平賀は論者と同じ問題意識を抱えているが、論者とは逆に「吸血鬼」という訳語を選択している。平賀、17 頁参照。

したアルノルト・パウエル (Arnold Paul)。多くの犠牲者が死んだはずの二人に襲われたと証言し、恐れをなした村人たちは、わざわざ墓から死体を掘り起こして確かめさせた。事件は公的な文書によって調査を担当したオーストリア宮廷軍事局に報告されるだけでなく、その関係記事がイギリスやフランスの雑誌にまで掲載された。² また、死者が蘇って人を襲うという不可思議な現象を説明するために多くの論文が執筆され、学者の間で意見が交わされた。例えば、ハンベルガーが言及しているヴァンパイアに関する論文は、1730 年代のものだけでも 20 本を超える。また、バトラーによれば、1732 年とその翌年にはヴァンパイアに関する四本の論文と 12 冊の書籍が出版されているという。さらに、クラニツァイによれば、ドイツだけでなくイギリスやフランスを含めると、1732 年だけで 33 冊もの出版物が刊行されている。³

しかし、これらの論文は今までそれほど注目を集めてこなかった。もちろん当時のいくつかの論文を要約して紹介している研究もあるが、⁴ 大半は単にその存在に言及するだけに留まる。その理由としては、ヴァンパイア文学研究と 18 世紀のヴァンパイア論文にはあまり接点がないという事情が挙げられるかもしれない。ドイツ語圏のヴァンパイア文学は、現状では 18 世紀に三作品 — ハインリヒ・アウグスト・オッセンフェルダの『ヴァンパイア (Der Vampir)』(1748)、ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーの『レノーレ (Lenore)』(1773)、ゲーテの『コリン

² Cf. The London Magazine, May 1732. In: *The London Magazine: or, Gentleman's Monthly Intelligencer*. Vol. 1 (1732). London 1732, pp. 51-89, here p. 76; The Monthly Intelligencer, March 1732. In: *The Gentleman's Magazine, or Monthly Intelligencer*. For the Year 1732, vol. II. London 1732, pp. 673-684, here p. 681; Le Glaneur historique, moral, litteraire, galant et calottin, pour Lundi 3. Mars 1732. In: *Le Glaneur historique, moral, litteraire, galant, et calottin. Ou recueil des principaux Evenemens arrivés dans le courant de cette Année; accompagnés de Réflexions. On y trouve aussi les Pièces fugitives, les plus curieuses, qui ont paru, tant en Vers qu'en Prose, sur toutes sortes de sujets, & en particulier sur les Affaires du Tens. Pour l'Année 1732*, Tome II. La Haye 1732, No. XVIII. 「ヴァンパイア」という単語がフランスで初めて使用されたのはこの 1732 年 3 月の『グラヌー (Le Glaneur)』、イギリスでは 1732 年 3 月の『マンズリー・インテリジェンサー (The Monthly Intelligencer)』であるとされる。アルノルト・パウルの事件に関する報告書がニュルンベルクで出版された 1732 年には、フランスやイギリスでも既にこの事件が記事になっていることから、事件が与えた影響の大きさ、もしくは事件に対する人々の関心の高さが窺える。ちなみに「ヴァンパイア」という言葉の由来については、ポーランド由来、トルコ由来、ギリシャ由来など諸説あり、専門家によって意見がわかれているうえに論旨から逸れるので、本稿では割愛する。詳しくは以下を参照。栗原成郎『スラヴ吸血鬼伝説考』河出書房新社 1991 年、28 頁；種村季弘『吸血鬼幻想』河出書房新社 1983 年、49-52 頁；平賀、134-136、151-168 頁；Miklosich, Franz: *Etymologisches Wörterbuch der slavischen Sprachen*. Wien 1886, Art. „vampirü“. S. 374f.; Wilson, Katharina M.: The History of the Word “Vampire”. In: *Journal of the History of Ideas* 46 (1985), pp. 577-583, here pp. 577f.

³ Vgl. Hamberger, Klaus: *Mortuus non mordet. Kommentierte Dokumentation zum Vampirismus 1689-1791*. Wien 1992, S. 271-275; Butler, Eric: *Metamorphoses of the Vampire in Literature and Film. Cultural Transformations in Europe, 1732-1933*. Rochester / New York 2010, p. 28; Klaniczay, Gábor: Historische Hintergründe: Der Aufstieg der Vampire im Habsburgerreich des 18. Jahrhunderts. In: Bertschik, Julia / Tuczay, Christa Agnes (Hg.): *Poetische Wiedergänger. Deutschsprachige Vampirismus-Diskurse vom Mittelalter bis zur Gegenwart*. Tübingen 2005, S. 83-111, hier S. 100. ただし、バトラーは 18 世紀前半のヴァンパイア論文を中心に据えているのではなく、概して 19、20 世紀以降の小説や映画を取り扱っている。

⁴ Vgl. Sturm / Völker, S. 519ff. また、シュトゥルム／フェルカーは 18 世紀のヴァンパイア事件の報告書や論文などを数は少ないものの収集している。Vgl. ebd., S. 451ff.

トの花嫁』— しか確認できず、『レノーレ』と『コリントの花嫁』は当時の一連の議論と、さほど関係がないのである。⁵ さらに19世紀のヴァンパイア文学では、ポリドリ『ヴァンパイア』に始まり、『ドラキュラ』を通じて現代に至っても広く認知されているような、貴族的で蠱惑的なヴァンパイア像が幅を利かせる。これは18世紀のヴァンパイア論文が扱う、プロゴヨヴィッツやバウルの事件に見られるヴァンパイア像とはかけ離れている。

そうした当時の論文や学者同士の手紙を多数収集、編纂したほぼ唯一の研究が、ハンベルガーのものである。⁶ 彼は「病像 (Krankheitsbild)」としてのヴァンパイアに注目し、医学的関心からヴァンパイア事件が注目を集めたと考察している。⁷ それ自体は間違いではない。事件の調査のために医師が派遣されたことや、論文の執筆者に医師が多いことから明らかである。しかし、そこに他の関心は全く見られないのだろうか。ハンベルガー自身も言及しているように、ヴァンパイア事件に心身問題との関係を見出すことも可能である。また、当時、オスマン・トルコ帝国と不穏な関係にあったハブスブルクは、国境の警備をそこに住む住民によって賄っていたため、ヴァンパイアに怯えた村人たちの移住を防ぐ必要に迫られたという考えもある。⁸ 他にも、クラニツァイは三つの関心に言及している。まず、キリストの復活や聖者の腐敗しない遺体というキリスト教の根本的な教義を保護するために、ヴァンパイアという存在を教会は

⁵ ただし、この中ではオッセンフェルダールの『ヴァンパイア』のみ当時のヴァンパイア論文との繋がりが認められる。本作が掲載された週刊誌『自然研究者 (Der Naturforscher)』(1747/48)の47、48号には、ジャン＝バティスト・ド・ボワイエ・ダルジャン侯の手になる『ユダヤ人の手紙 (Lettres juives)』(1738)が引用されているからである。ここでダルジャン侯はヴァンパイアについて論じており、オッセンフェルダールの『ヴァンパイア』はそれに触発されて書かれたものと思われる。また、ビュルガーの『レノーレ』については、これをヴァンパイア文学とみなさない研究者もいるため、18世紀のドイツ語圏ヴァンパイア文学は二作品しかないとも考えられる。詳しくは拙論を参照。「オッセンフェルダールのヴァンパイア詩 — 18世紀のドイツ・ヴァンパイア文学研究の補完として —」: 日本アイヒェンドルフ協会『あうろ〜ら』第34号(2017年)、1~17頁所収、3-4、12~16頁。当該の『ユダヤ人の手紙』については以下を参照。Sturm / Völker, S. 470-476; Hamberger, S. 217-222; *Der Naturforscher, eine physikalische Wöchenschrift auf die Jahre 1747 und 1748*. Leipzig 1748, 47. Stück, S. 367-372; 48. Stück, S. 375-380. ただし、ハンベルガーの研究書では137通目と紹介されているが、『自然研究者』では137通目ではなく125通目と紹介されている。『ユダヤ人の手紙』のドイツ語訳(1765)を見る限り、125通目は誤りで137通目が正しいと思われる。Vgl. d'Argens, Jean-Baptiste de Boyer: *Der hundert und sieben und dreyßigste Brief*. In: *Des Herrn Marquis d'Argens, Königl. Preuß. Kammerherrens und Directors der Philologischen Classe der K. Akademie der Wissenschaften. Jüdische Briefe oder philosophischer, historischer und kritischer Briefwechsel zwischen einem Juden, der durch verschiedene Länder von Europa reiset, und seinen Correspondenten an andern Orten. Aus dem Französischen mit des Herrn Verfassers Vermehrungen und Verbesserungen übersetzt*. Vierter Theil. Berlin 1765, S. 187-201.

⁶ 2000年以降の研究でも、ハンベルガーが収集した文献は現在に至るまでほぼ唯一の資料基盤を形成していると述べられている。Vgl. Nowosadtko, Jutta: *Der „Vampyrus Serviensis“ und sein Habitat: Impressionen von der österreichischen Militärgrenze*. In: *Militär und Gesellschaft in der Frühen Neuzeit*. 8 (2004), S. 151-167, hier S. 152.

⁷ Vgl. Hamberger, S. 8f., 18f.

⁸ Vgl. ebd., S. 22. 国境防衛のためにハブスブルクが行った軍事植民については以下を参照。河野淳『ハブスブルクとオスマン帝国 — 歴史を変えた〈政治〉の発明』講談社 2015年、64-77頁。

批判しなければならなかった。また、啓蒙主義時代の思想家は、その徹底した合理主義からヴァンパイアを迷信であると切り捨て、それを信じるのは無教養な下層民のみであるとして冷笑した。そして、そうした合理主義が栄える一方で、ヴァンパイア事件にオカルト的な説明を施すという流れもまた存在したのである。⁹ クラニツァイが「オカルト的な説明」を「合理主義的説明」に相対するものとしてとらえている点には少し問題があるが、医学的関心とは異なる視点から当時の論文を吟味することには確かに意義がある。なぜなら、当時の医学は現代のイメージと異なり、まだ完全に哲学や神学と切り離されて考えられていたわけではないからである。

そこで本稿は、1732 年に書かれたあるヴァンパイア論文、『*ヴェンパイア、あるいは吸血鬼についての詳細な公的文書 (Acten-mäßige und umständliche Relation von denen Vampiren oder Menschen-Saugern)*』(以下『公的文書』)¹⁰ から抽出できる「霊 (Geist)」にまつわる理論を考察する。この論文の著者¹¹ は、ヴァンパイアの印とされる腐敗しない死体、死後に伸びる爪や髪の原因を霊に帰しているのである。彼は当時の他の論者と同じく、彼の信ずるところの理論に基づいてヴァンパイアをめぐる謎を解き明かそうと試みた。そのため、時には他の論者の意見を参照しながら彼の理論を検討し、ヴァンパイア事件が必ずしも医学的関心のみからではなく、その他の様々な視点から注目されていたことを明らかにする。

まず準備作業として、次章では全ての発端となったプロゴヴォイツとパウルの両事件と、それがヨーロッパに広まっていた経緯を、主にハンベルガーとクロイター¹² を参照しながら確認する。なぜなら、当時の資料を参照できる研究が他にはほぼ見当たらないからである。ハンベルガーは個別の論文を詳しく論じてはおらず、部分的に編纂しているとはいえ、詳細な資料を収集しており、クロイターはヴァンパイア事件の報告書についての出来事の経過を丁寧に追っている。これらの研究は必要な情報をまとめるために役立つはずである。なお、本稿はプロゴヴォイツとパウルのヴァンパイア事件を中心的に取り扱うため、「ヴァンパイア」という

⁹ Vgl. Klaniczay, S. 102ff.

¹⁰ Anonymus: *Acten-mäßige und umständliche Relation von denen Vampiren oder Menschen-Saugern, welche sich in diesem und vorigen Jahren, im Königreich Servien herfürgethan. Nebst einen Raisonnement darüber und einen Hand-Schreiben eines Officiers, des Prinz-Alexandrischen Regiments, aus Medvedia in Servien an einen berühmten Doctorem der Universität Leipzig*. Leipzig 1732. 今後引用の際は略号「AL」を用い、本文中の括弧内に頁数のみを示す。

¹¹ ハンベルガーによれば姓名不詳である。Vgl. Hamberger, S. 184. また、現代の研究においても有名なヴァンパイア研究者であるミヒャエル・ランフトによれば、1732 年の『*ニーダー・ザクセン学術新聞 (Nieder-Sächsische Gelehrte Zeitung)*』34 号の 300 頁で、著者は正当な理由をもって「恥知らずな錬金術師 (ein unverschämter Alchemist)」と呼ばれているという。Vgl. Ranft, Michael: *Tractat von dem Kauen und Schmatzen der Todten in Gräbern, worin die wahre Beschaffenheit derer Hungarischen Vampyrs und Blut-Sauger gezeigt, auch alle von dieser Materie bißher zum Vorschein gekommen Schriften recensiret werden*. Leipzig 1734, S. 213, Anm. (*).

¹² Kreuter, Peter Mario: Vom „üblen Geist“ zum „Vampir“: Die Darstellung des Vampirs in den Berichten österreichischer Militärärzte zwischen 1725 und 1756. In: Bertschik / Tuczay (Hg.), S. 113-127.

単語は事件の報告書に則って使用する。つまり、ここであるヴァンパイアは墓から蘇り、生者に害をなす死者であり、貴族的なヴァンパイアや、蝙蝠に変身したり催眠をかけたりする文学上のヴァンパイアは意味しない。山奥の不気味な城に安置されている棺で目覚めるのではなく、村の墓場に埋められた棺から土にまみれて蘇るようなヴァンパイアが対象となる。

2. いかにしてヴァンパイアが知られたか

ことの始まりは、1725年の夏にウィーンの軍事行政機関に届いたある報告書であった。ハンガリーはグラディスカ区の役人であるフロムバルトが、セルビアのキシロヴァという村で発生した事件、それもペーター・プロゴヨヴィッツという死者が引き起こしたとされる事件について書き送ったのである。フロムバルトによれば、10週間前にペーター・プロゴヨヴィッツという男性が死亡したが、彼の死後八日のうちに老いも若きも九人が何らかの病気によってこの世を去った。彼らは一様に、就寝中に死んだはずのプロゴヨヴィッツにのしかかれ、首を絞められたと臨終の床で証言しているというのである。また、プロゴヨヴィッツの妻は死んだ夫が靴を求めてやってきたことに恐怖し、キシロヴァを去り別の村へ向かったという。村人たちはヴァンパイアが持つとされるいくつかの印 — 腐敗しない体、皮膚や髪、ひげ、爪の成長 — がないか確認するために、プロゴヨヴィッツの墓を暴くことを決定した。そしてフロムバルトを訪れ、彼だけでなく聖職者にも検分にも立ち会ってもらうことを望んだ。ベルグラードの上層部から返答が届く前にヴァンパイアに殺されることを恐れ、村人たちが村を出ていくだろうと考えたフロムバルトは、オスマン・トルコ帝国のことを考慮し、グラディスカの司祭と共にキシロヴァを訪れ、掘り出された死体を調べた。死体は悪臭がほとんどせず、鼻が欠けているもののとても新鮮な状態で、髪もひげも爪も伸びていた。古い皮膚は白っぽくなって剥がれ、新しい皮膚が現れていた。口内には新鮮な血液が確認でき、それについて村人たちは一同に被害者から吸ったものだと言った。村人たちはプロゴヨヴィッツの死体に杭を打ち、心臓を貫いたが、その際に大量の新鮮な血が死体の口や耳から流れ出ただけでなく、男根の勃起状態が解消された。杭で貫いた後、当地の習慣に従い、彼らは死体を燃やして灰にした。¹³

以上の内容が、1725年7月21日に刊行された『ウィーン日報 (Wienerisches Diarium)』¹⁴に、

¹³ ヴァンパイアの退治法が村人に知られていることからわかるように、ある程度古くからヴァンパイアはセルビアの民間伝承に根づいていた。セルビアの言語学者、民俗学者であるヴーク・カラジッチは『セルビア語辞典 (Srpski rječnik)』(1818)の「ヴァンパイア」の項で、山査子の杭で心臓を貫くというヴァンパイアの退治法について触れている。栗原、25-27頁；平賀、28-29頁参照。

¹⁴ 個人出版社から刊行された雑誌であり機関誌ではない。第一号の巻頭言に、「雄弁や詩による化粧を用いず、先入観なしに、ただ寄せられる報告の真実なところに従って (ohne einigen Oratorischen und Poëtischen Schminck / auch Vorurteil / sondern der blossen Wahrheit derer einkommenden Berichten gemäß)」と断りがあることから、編集者にとっては事実に基づく客観性が重要視されていたことが窺える。また、「目下の様々な出来事や戦争の経過に際して (bey jetzigen Begebenheiten und Kriegs-Läuffen)」とも

「ハンガリーのグラディスカ区からの書簡の写し (Copia eines Schreibens aus dem Gradisker District in Ungarn)」として特に注釈もなく掲載された。¹⁵ ここに確認できる「彼ら〔村人たち〕がヴァンパイアと呼ぶ人間たちには〔…〕 (bey dergleichen Personen (so sie Vampyri nennen) [...])」という文章は、おそらくドイツ語の公的な文書に「ヴァンパイア」という単語が用いられた最初期の例であると言えよう。¹⁶ この『ウィーン日報』の直後にも、『数日前に上ハンガリーのキソロヴァという村で発生した恐るべき事件 (Entsetzliche Begebenheit, welche sich in dem Dorf Kisolova in Ober-Ungarn, vor einigen Tagen zugetragen)』というパンフレットが出回った。しかし、これらの記事によってヴァンパイアが一躍有名になったかという、そういうわけではなかった。この事件は、さしあたり政府にも学界にも大した反響を呼ばなかったのである。プリンツ・オイゲン・フォン・ザヴォイエンが長官を務めるウィーンの宮廷軍事局は、7月25日にベルグラードに在中しているセルビア地方担当の総司令官であるカール・アレクサンダー・フォン・ヴェルテンベルク公にさらなる調査を命じたが、8月の彼の報告書をもって事件は解決済みとみなされた。ヴァンパイアが存在するという村人たちの信仰も、そもそもヴァンパイアという単語さえも触れられることはなかった。学者たちの間でもほとんど反応はなく、例外的にミヒャエル・ランフト¹⁷ が彼の『墓の中の死者の咀嚼についての歴史的・批判的論考 (Dissertatio

あるように、ハンガリーなどをめぐるオスマン・トルコ帝国との戦争が影響したためか、刊行してしばらくは戦争の報告記事か、何らかの形で戦争に関係のある記事がほとんどを占めていたという。Vgl. *Wienerisches Diarium*, Anno 1703, Num. 1, für den 8. Augusti. Wien 1703, S. 1; Reisner, Andrea / Schiemer, Alfred: Das Wien(er)sche Diarium und die Entstehung der periodischen Presse. In: Karmasin, Matthias / Oggolder, Christian (Hg.): *Österreichische Mediengeschichte*. Bd. 1: Von den frühen Drucken zur Ausdifferenzierung des Mediensystems (1500 bis 1918). Wiesbaden 2016, S. 87-112, hier S. 91f.

¹⁵ Vgl. *Wienerisches Diarium*, Anno 1725, Num. 58, für den 21. Julii. Wien 1725, S. 11f.; Hamberger, S. 43-45.
¹⁶ 17世紀にも墓の中の死者について書かれた論文は存在するが、ヴァンパイアという単語は用いられていなかった。Cf. Melton, J. Gordon: *The Vampire Book. The Encyclopedia of the Undead*. Detroit 2011, Art. "Germany, Vampires in", pp. 283-291, here p. 285. また、ハンベルガーが一次文献として挙げている、1725年より前に執筆された墓の中の死者についての論文や記事は10本に満たず、17世紀のものはわずかに三本しかない。Vgl. Hamberger, S. 272f. ヴァンパイア、あるいは蘇る死者について大々的に論じられるには、やはり1730年代を待たなくてはならない。

¹⁷ 彼とドン・オーギュスタン・カルメの名前はヴァンパイア研究において広く知られているため、邦書文献でもまず言及されないことはない。種村、55-62、83頁；平賀、2-4、33頁；日夏耿之介／モンタギュー・サマーズ『吸血妖魅考』筑摩書房 2003年、79-81頁参照。ランフトはライプツィヒ近郊に牧師の息子として生まれた人物で、神学、哲学を学び、後にネブラの助祭となった。Vgl. *Allgemeine deutsche Biographie*. Bd. 27. *Quad – Reinold, herausgegeben durch die historische Comission bei der Königl. Akademie der Wissenschaften*. Neudruck der 1. Auflage von 1888. Berlin 1970, Art. „Ranfft, Michael“, S. 228f. カルメはフランスのロレーヌに生まれた、カトリックのベネディクト派修道士である。哲学と神学を学び、1707年から1716年にわたって23巻にも及ぶ聖書の注釈書を執筆する。そして、1746年には、ヴァンパイアに関する有名な論文『天使、悪魔、精霊の顕現、並びにシレジア、モラヴィア、ボヘミア、ハンガリーのヴァンパイア、蘇る死者についての論考 (Dissertations sur les Apparitions des Anges, des Démones & des Esprits. Et sur les Revenans et Vampires. De Hingrie, de Boheme, de Moravie & de Silésie)』を著す。この論文は多くの読者を獲得し、フランスでは1749年、1751年に版を改める。また、ドイツでは1752年、イギリスでは1759年に出版されている。Cf. Melton, Art. "Calmet, Dom Augustin (1672-1757)", pp. 99-101.

historico-critica de masticatione mortuorum in tumulis)』(1725) という論文内でフロムバルトの書簡を引用した程度であった。¹⁸

しかし、1730 年代に入ると状況は一変する。ヴァンパイアという存在が、ある報告書をきっかけに一躍注目を集めたのである。1731 年 12 月、セルビアのヤゴディナにある司令部にグララーザという疫学者が報告書を送った。彼はヤゴディナの帝国軍司令官だったシュネッツァー中佐によって調査を命じられていた。メドヴェギアに住むシュタラータ (Stalata、現シュタラーチ Stalać) の民兵隊に属するハイドック¹⁹ たちに、六週間で 13 人の死者が出たというのである。12 月 12 日にグララーザが調査したところ、マラリアなどの伝染病の兆候は一切確認できず、四旬節の断食前のための暴飲暴食による脇腹、胸の痛みの訴えもなかった。しかし、さらに調査を進めると、ヴァンパイアのために次々に人が死んでいるのだと村人が信じていることが判明する。シュタラータの下士官とクラゴバツ (Kragobaz、現クラグイエヴァツ Kragujevac) の指揮官と共にグララーザが説得にあたっても、彼らは意見を变えようとしなかった。それどころか、ヴァンパイアを始末するより、むしろ他の土地に移りたいとまで言い出したのである。

村人たちがこの話にあまりに固執するので、真相を確かめるためにグララーザは 10 基の墓を掘り返させた。そのうちの一つは七週間ほど前に死亡したミリツァ (Miliza) という名の 50 歳の女性のものであった。彼女は六年ほど前にトルコ側からメドヴェギアに移り住んだとされる。生前から既にかなり痩せこけており、彼女が近所の人々に語ったところによると、ヴァンパイアが殺した羊を二匹、トルコ領で食べたのだという。そのために彼女は死後にヴァンパイアになったのだと村人は固く信じている。彼女の死体は棺に納めず湿った土に直接埋められていたため、生前の状態や年齢を考えると七週間も過ぎれば腐敗して当然のはずであった。しかし、死体の鼻や口からは新鮮な血液が流れ出しており、体は膨れあがって内出血を起こしていた。また、シュタノ (Stanno) という一ヶ月前に埋葬された 20 歳の女性の墓も暴かれた。生前、彼女は人々に、ヴァンパイアがはびこるトルコ領にいた頃、身を守るためにヴァンパイアの血を自身に塗たくったと語っていた。そのために、出産による病で亡くなった後、彼女はヴァンパイアとなったのだという。その他にもグララーザは数名の死体の様子と名前を簡潔に書き記しており、ヴァンパイアであると思しき死体が確認できたという。村人たちは適切な処理を当局に願い出ており、グララーザも報告書の末尾で、彼らを落ち着かせるためにそれを認めたほうがよからうと進言している。²⁰

この報告はベルグラードの司令部にも送られたが、ヴェルテンベルク公不在の折だったため、

¹⁸ Vgl. Hamberger, S. 45, 97; Kreuter, S. 115.

¹⁹ ハイドックとは、オスマン・トルコ帝国に対して 15 世紀末に配備されたハンガリー地方の兵士を指す。Vgl. Ranft, Michael: *Traktat von dem Kauen und Schmatzen der Toten in Gräbern. Michael Ranft in einer Bearbeitung von Nicolaus Equamius*. Diedorf 2006, S. 92, Anm. 66.

²⁰ Vgl. Hamberger, S. 46-49; Kreuter, S. 116ff.

暫定司令官であったアントン・ボッタ・ダドルノは軍医ヨハン・フリュッキンガー他数名を派遣し、さらなる調査を命じた。調査は1732年1月7日に開始され、その報告書は1月26日にベルグラードの司令部にて処理されている。²¹ また、この調査はシュタラータのハイドックの大佐であるゴルシツ、「少尉 (Hadnack / Leutnant)」、「村長 (Bariactar)」²² と村で一番年長のハイドックを同伴して進められている。

村人の証言によると、五年ほど前にアルノルト・パウルという人物が荷馬車の事故で亡くなった。彼は生前に、トルコ領セルビアのコソヴァ (Cossowa) でヴァンパイアに襲われたので、治療のためにヴァンパイアの墓の土を食べ、その血を体に塗りたいと吹聴していた。彼の死後20日か30日ほどすると、数名の村人がパウルに襲われたと証言し、最終的には実際に彼らのうち四人が死亡した。村人たちが死後40日後にパウルの死体を掘り起こすと、死体は完全で全く損傷がなく、目、鼻、口、耳から新鮮な血が流れ出ており、衣服や棺が血まみれであった。手足の古い爪は剥がれ落ち、新しいものが生えてきていた。パウルはヴァンパイアであると村人は判断し、慣習に従って心臓を杭で貫いたが、その際に彼は絶叫し、大量の血を吹き出した。村人たちはその日のうちに死体を灰にし、墓に投げ入れた。また、パウルに殺された者たちもヴァンパイアになったに違いないと言い、村人たちはパウルの死後に死亡した四人にも同じ処置を施した。

しかし事態はそれだけで終息しない。村人たちはこの証言に付け加えて、パウルは人間だけでなく家畜も襲って血を吸ったのだと訴える。それを食べた者がいるため、再びヴァンパイアがこの村に現れるようになったというのである。彼らの話では、ここ三ヶ月以内に17名の老若男女が死亡し、そのうち数名は以前に病気を患ったことがないにもかかわらず二、三日のうちに息を引きとった。調査団の面々は疑わしい者の墓を掘り起こして死体を検めた。報告書には13体の死体の状態が克明に記録されている。腐っている死体も多少発見されたが、それ以外の腐敗していない死体は頭を切り落とされ、灰にして水に投げ込まれた。²³

²¹ Vgl. Hamberger, S. 49. この報告書は、『見聞録 (Visum et Repertum)』という題で、著者不明のヴァンパイア論の補遺と共に出版された。ここにはフロムバルトの報告書も掲載されている。Vgl. Anonymus: *Visum et Repertum. Über so genannten Vampirs oder Blut-Aussauger; so zu Medvegia in Servien, an der Türkischen Granitz, den 7. Januarii 1732 geschehen. Nebst einem Anhang von dem Kauen und Schmatzen der Todten in Gräbern.* Nürnberg 1732 [AN], S. 3-11, 12-15.

²² フリュッキンガーの報告書では「ハドナック (Hadnack)」や「バリアクター (Bariactar)」というハンガリー語の役職名がそのまま用いられているため、彼らの名前は不明である。Vgl. AN, S. 4. ランフトの論文を編纂し、注釈をつけたエクイアミクスによれば、「バリアクター」は逐語訳では「旗手 (Bannerträger)」、元来は「族長 (Stammesführer)」を意味するが、ここでは「村長 (Dorfoberster)」の意味で用いられているという。Vgl. Ranft (2006), S. 91, Anm. 65. エクイアミクスやクロイターと異なり、ハンベルガーは「ゴルシツ (Gorschitz)」を「大佐 (Kapitän)」を意味する役職名だととらえている。Vgl. Kreuter, S. 119; Hamberger, S. 49.

²³ Vgl. AN, S. 3-11; Hamberger, S. 49-54. フリュッキンガーの報告書に、パウルが約五年前、つまり1727年頃に死亡したとあるので、グラウザーの伝える事件 (1731年12月の調査で、死者が出たのはここ

このフリュッキンガーの報告書が起爆剤となり、1730年代には多くの論文が執筆された。ランフトが、彼の1725年の論考のドイツ語訳を含む『墓の中の死者が囁むこと、ぴちゃぴちゃと音を立てることについての論文（Tractat von dem Kauen und Schmatzen der Todten in Gräbern）』を1734年に出版していることも重要である。彼は読者に向けての巻頭言で、新しく起きた事件についての報告書が新しい版を出すきっかけを与えたという旨を述べている。²⁴ フリュッキンガーの報告書の影響からか、それまでほとんど顧みられることがなかったフロムバルトの報告書も注目を浴びることとなった。²⁵ フロムバルトやグラーザーの報告書と異なり、フリュッキンガーの報告書がヴァンパイア事件をこれほど有名にした理由として、クロイターは以下の点を挙げている。まず、フリュッキンガーの報告書が巧みに文書化されており、構造が極めて論理的だったこと、次に、報告書が村人たちのヴァンパイア信仰に関する情報を大量に含んでいたことである。一方、グラーザーの文章はぎこちなく、ヴァンパイア信仰ではなく医学的な話に限定されている。また、フロムバルトはただ現地で見た出来事について報告しているのみで、その背景については触れておらず、ヴァンパイア信仰に興味を抱いていないと彼は述べる。²⁶ この主張を完全に受け入れるかはともかく、フリュッキンガーの報告書が他の報告書よりも詳細であり、かつ物語として読みやすく構成されているという点は事実である。だからこそ、彼の報告書を通してヴァンパイア事件が世に広まったのであろう。

六週間のこと）とフリュッキンガーの伝える事件は一見別の事件であるように思える。しかし、実際は、両事件は繋がっていると考えられる。ミリツァやシュタナ（グラーザーの報告書ではシュタノ Stanno）などの掘り起こされた死体については、名前、状態に関するどちらの報告書の記述も非常に酷似しており、別人であるとは考えにくい。シュタナが20歳で出産により死亡し、生前にヴァンパイアの血を体に塗ったと公言していたこと、ミリツァが生前にヴァンパイアに襲われた羊を食べたと話していたこと、生前の彼女は痩せていたが死体は太っていたことなどは、どちらの報告書でも触れられている。その他にもミロエ（Milloe）という名の16歳の少年や（グラーザーの報告書ではミロイ Milloi で14歳）、ヨアヒムという名の17歳の少年（グラーザーの報告書では15歳）の名前も記録にある。フリュッキンガーの報告書では繋げて記されているためにわかりにくいですが、おそらく、パウルの死後に死亡した四人の話と、三ヶ月で死亡した17人の話の間に五年ほどの空白期間があったのだと思われる。パウルに襲われたとされる家畜が食べられるまでに五年ほどの歳月があったのであろう。死亡した四人の記述には「パウルの死後20日、あるいは30日（In 20 oder 30 Täg nach seinem [Pauls] Todtfahl）」とある一方で、17人のほうの記述には単に「三ヶ月のうちに（in Zeit 3er Monahten）」としかなく、それを示唆しているように思われる。

²⁴ Vgl. Ranft (2006), S. 10; Ranft (1734), S. 3f. ここに挙げた1734年版以前にも、1728年に増補版が出版されている。Ders.: *De masticatione mortuorum in tumulis, liber singularis: exhibens duas exercitationes, quarum prior historico-critica posterior philosophica est.* Leipzig 1728. ランフト自身は1734年版の序文で、1728年版の題を[D]e Masticatione mortuorum in tumulis Liber singularis, continens duas Dissertationes, quarum prior Historico-Critica, posterior vero Philosophica est. と書いており、上記の1728年版とわずかに題が異なる。Vgl. Ranft (1734), S. 3.

²⁵ 例えば、フロムバルトの書簡はランフトの論文以外にも以下の論文に掲載されている。どちらも1732年に出版されたものである。Vgl. W. S. G. E.: *Curieuse und sehr wunderbare Relation von denen sich neuer Dingen in Servien erzeugenden Blut-Saugern oder Vampyrs, aus authentischen Nachrichten mitgetheilt, und mit Historischen und Philosophischen Reflexionen begleitet von W. S. G. E.* 1732, S. 3-6; AL, S. 37-40.

²⁶ Vgl. Kreuter, S. 115, 117f.

ただ、グラーザーの報告書がヴァンパイアの知名度をあげるために全く貢献をしなかったわけではない。ハンベルガーによると、グラーザーは自分の報告書の写しをウィーンの「健康協会 (Collegium Sanitatis)」に送り、その数ヶ月後、ウィーンの医師である父、ヨハン・フリードリヒ・グラーザーに宛てて送っている。そして、そのヨハンはニュルンベルクの雑誌である『文芸通信 (Commercium Litterarium)』の通信使として、1732 年 2 月 13 日の手紙で編集者のヨハン・クリストフ・ゲッツにパウエル事件について知らせているのである。²⁷ ゲッツは、共に『文芸通信』を刊行したクリストフ・ヤーコブ・トロイ²⁸ とヴァンパイアについて手紙で意見を交わし、彼らが属する「自然愛好会 (Academia Naturae Curiosorum)」の学者たちの間でヴァンパイアについての風聞が広まった。²⁹

また、時期を同じくして、ライプツィヒの教授でありレオポルディーナ帝国アカデミーに属するミヒャエル・エルンスト・エトミュラー³⁰ に、アレクサンダー・フライヘル・フォン・コトヴィッツという士官候補生から手紙が送られた。奇しくもフリュッキンガーの報告書が司令部で受理された 1 月 26 日のことである。この手紙はプロゴヨヴィッツ事件でもパウエル事件でもなく、ククリナという村で起きた事件について書かれている。報告書ではないのでそれほど詳細に記されているわけではないが、コトヴィッツが聞いた話では、二人の兄弟がヴァンパイアに悩まされており、交代で見張りをすることにしたい。ある晩、犬のようなものが扉を開けたので、片方が叫び声を出して追い払った。しかし、ついには二人とも寝入ってしまい、片方が血を吸われ、その 10 日後に彼は死亡したという。また別の話では、埋葬されたはずのハイドックが翌晩に妻を訪ね、同衾した。妻は妊娠し、後に子供が生まれたが、その子供には手足

²⁷ Vgl. Hamberger, S. 54.

²⁸ 薬剤師の息子としてニュルンベルク近郊で 1695 年に生まれ、アルトドルフ大学で医学を学ぶ。1717 年にはヴェルツブルクやフランクフルト、スイスなどを周遊。果てにはパリに一年ほど滞在し、解剖学、植物学を学ぶ。オランダでは、著名な医師であり植物学者であるヘルマン・ブールハーフェとも親交を結んでいる。1720 年に故郷のニュルンベルクで医者職を得て、当地の「医学協会 (Collegium Medicum)」に正規の研究者として受け入れられる。1727 年にはレオポルディーナ帝国アカデミーに所属。1730 年にはアルトドルフのシュルツェ博士とニュルンベルクのゲッツ博士によって刊行されていた『文芸通信』の共同編集者となる。この雑誌は、有名な作品や論文の批評だけでなく、有名無名に限らず自筆論文なども掲載した最初の雑誌であった。トロイ自身も 133 本の、解剖学、化学、植物学などに関する自筆論文を投稿。1769 年にニュルンベルクで息を引き取るまで、生涯を通じて精力的に活動が続けた。Vgl. *Allgemeine deutsche Biographie*. Bd. 38. Thienemann – Tunicus, herausgegeben durch die historische Commission bei der Königl. Akademie der Wissenschaften. Neudruck der 1. Auflage von 1894. Berlin 1971, Art. „Trew, Christoph Jacob“, S. 593ff.

²⁹ Vgl. Hamberger, S. 55.

³⁰ 1673 年にライプツィヒに生まれる。父親は医者。当初は故郷で、後にオランダ、イギリスに旅をして医学を学ぶ。故郷に戻ってから 1699 年に博士号を取得し、1702 年には医学部の員外教授となる。1709 年には生理学、1724 年には病理学の正規職を得て、1732 年 9 月に亡くなるまでその地位に留まった。Vgl. *Allgemeine deutsche Biographie*. Bd. 6. Elben – Fickler, herausgegeben durch die historische Commission bei der Königl. Akademie der Wissenschaften. Neudruck der 1. Auflage von 1877. Berlin 1968, Art. „Ettmüller, Michael Ernst“, S. 401.

がなく三日後にはソーセージのように皺くちやになったという。³¹

フロムバルト、グラウザー、フリュッキンガー、コトヴィッツ、この四人の報告書はヴァンパイア事件を伝える中心的なテキストであった。³² ベルグラードの軍司令部を通してテュービンゲン大学やベルリンのプロイセン科学アカデミーへ、ヨハン・フリードリヒ・グラウザーを通してニュルンベルクの『文芸通信』の学者たちへ、コトヴィッツの手紙を通してアルトドルフのレオポルディーナ帝国アカデミーへ、というように、政府や学界、そしてヨーロッパにヴァンパイアの存在が認知されることとなったのである。³³ では、次章から、そうして広まっていったヴァンパイア事件が1730年代に一体どのように説明されたのかを、「霊 (Geist)」にまつわる理論、並びにそれとは別の観点に立ついくつかの論を通して確認していくことにする。

3. ヴァンパイアと霊の理論

当時の人間は、どういう理論からヴァンパイアを説明しようとしていたのだろうか。エトミュラーに宛てた手紙の末尾で、コトヴィッツはヴァンパイア事件が何によって引き起こされているのかについて意見を仰いでいる。すなわち、「共感作用的なもの (etwas Sympathetisches)」か「悪魔的なもの (teuflisches)」か「アストラル霊の作用 (Astralischer Geister Würckung)」によるものかという質問である。³⁴ エトミュラーの返事は不明であるが、この質問から、これらがヴァンパイアを説明するものとしてコトヴィッツに理解されていたことが窺える。また、『公的文書』の著者は彼の「世界霊 (Welt-Geist)」説以外を取る人間を三種類にわけ、悪魔に原因を帰する者、³⁵ 「共感 (Sympathie)」という語を用いて「不明なものを同じく不明なもので (obscurum per asque obscurum)」(AL, 7) 説明しようとする者、ヴァンパイア事件自体を疑う者に分類し、揶揄している。³⁶ 悪魔説は悪魔がヴァンパイア事件を起こしたとする説であるが、アストラル霊説、世界霊説、共感作用説は一体どういう理論なのであろうか。結論を先取りして言えば、これらは人間に霊が備わるという説を前提とする、ほぼ同じ原理に基づいている。

理論自体を詳しく見ていく前に、まず『公的文書』の構成について確認しておく。『公的文書』は、読者への巻頭言、次にフリュッキンガーの報告書、コトヴィッツの手紙、『公的文書』の著者がライプツィヒのさる博士に宛てた手紙ときて、最後にフリュッキンガーの報告書について

³¹ Vgl. Hamberger, S. 56. コトヴィッツの報告書は当時の論文にも掲載されている。Vgl. AL, S. 16-18.

³² 特にフロムバルトとフリュッキンガーの報告書はヴァンパイア研究ではあまりに有名で、研究書で必ず取り上げられるためか、邦書文献でも言及しているものが多い。栗原、16~19 頁；仁賀克雄『ドラキュラ誕生』講談社 1995 年、67~70 頁；種村、18~19、113~118 頁；日夏/サマーズ、276~282 頁；平賀、2~4、33~35 頁参照。

³³ Vgl. Hamberger, S. 22.

³⁴ Vgl. ebd., S. 56; AL, S. 18.

³⁵ 同時代では、例えば W. S. G. E. の論文や『見聞録』の補遺で悪魔説がとられている。Vgl. W. S. G. E.; Ranft (1734), S. 233; AN, S. 16ff.

³⁶ Vgl. AL, S. 5ff.

の著者の考察という並びになっている。読者への巻頭言において、著者は、ここでは「人間の三分説 (die Lehre von denen dreyen Theilen des Menschen)」(AL, 4f.)にだけ言及すれば事足りると述べる。これは、人間が三つの部分、「魂 (Seele)」、「霊 (Geist)」、「肉体 (Leib)」にわけられるという考えである。著者は聖書を典拠として挙げているが、以下に該当箇所を引用しておく。³⁷

そして、主なる神は人を土くれからつくり、命の息吹 (de[r] lebendige[] odem) をその鼻に吹き込んだ。そうすると人は生きた者 (eine lebendige seele) となった。(A. T., Gen. II. 7)

あなたは私の明かり (meine leuchte) をともし、わが主、わが神は私の闇を照らされます。(A. T., Ps. XVIII. 29)

あなたは命と恩恵を私に与えられ、あなたの庇護が私の息吹 (odem) を守られた。(A. T., Hiob. X. 12)

というのも、神の言葉は生きていて力があり、あらゆる諸刃の剣より鋭く、魂と霊 (seele und geist)、髓と骨を切り離すまで貫くのであり、心の思いと思考を裁くからである。(N. T., Hebr. IV. 12)

するとマリアは言った。／「私の魂 (seele) は主をあがめ、私の霊 (geist) は私の救い主である神を喜びます」(N. T., Luc. I. 46, 47)

³⁷ 聖書の引用は『公的文書』の年代を考慮して以下の版により、旧約聖書は「A. T.」、新約聖書は「N. T.」で括弧内に記す。Biblia, Das ist / Die ganzte Heilige Schrift Alten und Neuen Testaments / Teutsch / D. Martin Luthers. Mit Summarien / richtiger Eintheilung der Biblischen Bücher und Capitel / auch Concordantien / nebst einem Gesang- und Gebetbüchlein; Über das mit Erklärung des Catechismi durch Biblische Sprüche / samt einem Anhang auserlesener Trost-Sprüchen und Trost-Gründen in allerhand Anligen; Auff's neue nützlich zugerichtet / und mit der ersten nach Lutheri sel. Tod in Wittenberg Anno 1546. gedruckter Edition auff's fleissigste zum drittenmal conferiret von der Theologischen Facultät daselbsten; nebst dero selben Vorrede. Mit Röm. Käyserl. auch Königl. Pohln. Maj. Maj. und Churfürstl. Sächs. allergnädigsten Befreyungen. Wittenberg 1701. ランフトは自著で該当箇所を『創世記』2章7節、『詩篇』18章29節、『ヨブ記』10章12節、『ヘブル人への手紙』4章12節、『ルカによる福音書』1章46、47節 (Gen. II. 7. Ps. XVIII. 29. Hiob. X. 12. Hebr. IV. 12. und Luc. I. 46. 47.)とわかりやすくまとめている。Vgl. Ranft (1734), S. 213, Anm. (**). また、ランフトは同頁で、『公的文書』の著者が『テサロニケ人への第一の手紙』の5章23節を引用していないことに疑問を抱いている。なぜなら、この箇所のほうが人間の三分説についてよりはっきりと明示されているからである。「平和の神があなた方をすっかり清めてくださるよう。あなたの霊と魂と肉体 (geist ganzt samt der seele und leib) を守って、我らの主イエス・キリストの降臨の際に、罰されるところのない者にしてくださるよう」(N. T., I. Thess. V. 23)

『公的文書』の著者は、神が人の鼻に命の息吹を吹き込む前は、人は「霊 (Spiritu[s])」(AL, 5) を持つ「肉としての人間 (ein Körperlicher Mensch)」(Ebd.) であったために三つと数えられるとか、³⁸ 明かりというのは霊に他ならないとか、神の言葉は魂と霊を切り離すということが言われているというように、聖書を読み解きながら人間の三分説を正当化している。では、著者はなぜ、これほど三分説にこだわるのだろうか。後に詳述するが、『公的文書』の著者が人間の三つの部分でとりわけ重要視しているのは霊である。彼は、死後も霊が肉体に残っていることに、腐敗しない死体の謎があると考えているのである。

報告書についての考察の中で、著者は人間の命が魂に依存していると述べる。なぜなら、魂という本質的な部分が去ると、人間はもはや人間ではなく、ただの肉体でしかないからである。ここで彼は修辞的な問いを発する。肉体が魂を持たなくても、その肉体が「生気に満ちて (lebhaft)」(AL, 26) いることは可能だろうか、と。当然、可能であると彼は続ける。なぜなら、人間は魂、つまり息吹を入れられる前から既に造られており、また、命そのものである神は死んだ者を作ることができないからである。神が生きている者しか造ることができず、しかし、そこに魂がまだ入っていないのであれば、肉体の中に既に「生きているもの (was lebendes)」(Ebd.) が存在するはずである。『公的文書』の著者は、それこそが霊であると主張している。

では、著者が持論の眼目に掲げている世界霊は、霊と一体どのような関係にあるのであろうか。『公的文書』の著者は博士に宛てた手紙の中で世界霊に言及している。彼によれば、それは空気という元素である。それは天上の秘密を内包し、他の元素を伝達するが、この働きによって人間のうちにある霊が互いに交流できる。なぜなら、人間の霊は一つの源、つまり世界霊から発し、水から水の一滴をわかるように分けられているだけなので、霊と霊は互いに容易く調和するからである。この説明から判断するに世界霊と霊は同じ存在である。この世界霊から栄養を与えられて霊は生きている。著者は、霊は霊を引き寄せ、それを吸うことで栄養を得ると主張する。つまり、この栄養により生きている霊が死後に残ることで、ヴァンパイアは腐ることがないのである。死体からの流血現象、ひげや爪の成長も彼はこれが原因であるとみなしている。³⁹ ひげや爪は霊の栄養により成長しており、血として流れ出ているのは霊が得た栄養分だというのである。霊が霊を吸うという考えは現代の感覚からすると奇妙に思えるが、著者は再び聖書を例に取り、前代未聞のことではないと述べる。⁴⁰

³⁸ 一般的には「息吹 (Atem/Odem)」はギリシャ語の「プネウマ (Pneuma)」、ひいてはラテン語の「スピリトゥス (Spiritus)」と同一視されるはずであるが、『公的文書』の著者は息吹を霊ではなく魂と同一視しているようである。廣松渉 他編『岩波 哲学・思想事典』岩波書店 1998 年、1387 頁、「プネウマ」参照。

³⁹ Vgl. AL, S. 29, 31.

⁴⁰ Vgl. ebd., S. 22.

というのも、全能者の矢が私の内に刺さり、その怒りが私の霊 (mein[]geist) を吸いつくし、神の恐ろしさが私に向けられるからである。(A. T., Hiob. VI. 4)

思想史を紐解いてみると、ギリシャ哲学、特にストア派では、「息吹」を意味する「プネウマ」は概して「物質的な (materiell)」ものと考えられていたという。⁴¹ 医学史における精気論では「プネウマ／精気」は生命の元となる存在であり、心臓によって生み出された熱を冷やすために肺を通して体に送られるとされた。この論の創始者と考えられている紀元前一世紀頃のアッタレイアのアテナイオスは、ストア派の哲学者であるアパメイアのポセイドニオスに師事している。また、紀元前三世紀頃、ヘレニズム時代に生まれた生理学の父であるエラシストラトスは、人体が血液と二種類のプネウマによって育まれていると考えた。心臓でつくられる「生命のプネウマ／生命精気 (pneuma zootikon / spiritus vitalis)」と脳でつくられる「心のプネウマ／精神精気 (pneuma psychikon / spiritus animalis)」である。彼によれば、血液は静脈、プネウマは動脈と神経によって運ばれる。プネウマの原料は肺で取り込まれた空気である。マルクス・アウレリウスの侍医であったガレノスもこの思想を踏襲しており、彼はさらに「自然のプネウマ／自然精気 (pneuma phsykon / spiritus naturalis)」を加えた。⁴² また、この霊の源とされるのが「世界霊魂 (Weltseele)」であった。これはプラトンの『ティマイオス』において初めて明確に語られた概念で、有機体としての世界を活性化する原理だとされる。⁴³ この世界霊魂から、呼吸を通して新たな霊が体内に入り、既にあった霊と同化する。霊は血液によって体の各部に運ばれるのである。⁴⁴ 『公的文書』の著者は聖書に典拠を求めており、こうした物質的な「霊／プネウマ」概念を念頭に置いていたかは不明である。しかし、彼の世界霊の概念は明らかに世界霊魂と同じものであるため、ある程度ギリシャ哲学には通じていたのではないかと考えられる。

また、「恥知らずの錬金術師」と呼ばれていたらしい『公的文書』の著者は、実際に錬金術について多少は明るかったようで、17世紀イギリスの医師であり錬金術師であったロバート・フラッドによる小麦の「精 (Spiritus)」⁴⁵ 抽出実験を引用して、霊が霊を引き寄せることの証明としている。⁴⁶ 他にも、彼はプロゴヴォイツ事件について、「強い交感能力 (ein starckes Commerce)」を持っている人間が次々と死んでいくのだと述べ、著名な医師であり錬金術師で

⁴¹ Vgl. Ritter, Joachim (Hg.): *Historisches Wörterbuch der Philosophie. Völlig neubearbeitete Ausgabe des „Wörterbuch der philosophischen Begriffe“ von Rudolf Eisler*. Bd. 3: G–H. Basel / Stuttgart 1974, Art. „Geist“, Sp. 155.

⁴² Vgl. ebd., Sp. 159; ヴォルフガング・エックハルト『医学の歴史』(今井道夫／石渡隆司 監訳) 東信堂 2014年、46–47頁；梶田昭『医学の歴史』講談社 2015年、77–79頁。

⁴³ 廣松渉 他編、937頁、「世界霊魂」参照。

⁴⁴ Vgl. Ritter (Hg.), Art. „Geist“, Sp. 180.

⁴⁵ 中世の錬金術では、「スピリトゥス (Spiritus)」という言葉は、例えば「酒精 (spiritus vini / Wein-Geist)」のような、特定の素材に特徴的な極小の物質の発散を指した。Vgl. ebd.

⁴⁶ Vgl. AL, S. 27.

あるパラケルススの著作にも同じことが書いてあると付け加えている。⁴⁷

この交感能力とは何を指すのであろうか。この考えは、実はアストラル霊説や共感作用説と決して無関係ではない。『公的文書』の著者によれば霊は世界霊を通して互いに交信する力、つまり互いを感じ取る力があるが、善良な霊との交信を「共感 (Sympathia[])」(AL, 21)、邪な霊との交信を「反感 (Antipathia[])」(Ebd.) という。彼は、ヴァンパイア事件の被害者はこの邪な霊に自身の霊を吸われることによって命を落としたと主張している。共感作用による説明を巻頭言で揶揄しつつ否定しておきながらも、『公的文書』の著者の世界霊による説明はその実、それと重なるところがある。

グロイによれば、人間が自然と共に歩むこと、互いに作用することが人間の自然に対する「共感的な関係 (sympathetisches Verhältnis)」であるという。⁴⁸ 呪術的・神話的な世界観においては、「自然と精神、自然と理性、自然と文化、自然と文明 (Natur und Geist, Natur und Vernunft, Natur und Kultur, Natur und Zivilisation)」などの二項対立において現れるような、客体である自然と主体である精神の対立や差異はまだ見られない。そうした世界観からすると自然は異質なものである人間に対立するものでもなく、自然と人間は未だ分離されていない統一体を形成していた。また、人間は自身を取り巻く自然の一部でもあり、自然の営みに参加していた。人間は自然からわかたれることなく、自然に対して能動的にも受動的にもふるまいながら、生の営みを実践していたのである。しかも、それは「肉体 (Leib)」のみならず、「霊 (Geist)」や「魂 (Seele)」の面でも関わっている。つまり、肉体的な体験や感覚の興奮、抽象的な思考のどれか一つだけというわけではなく、全体としての包括的な生の営みの中で自然と相互に関係しているということである。この人間と自然の相互作用に基づいているのが「共感的呪術 (sympathetische Magie)」であり、これは離れたものにも影響力を行使できる。それはたとえ空間的、時間的、心理的に離れていても成り立つという。

つまり共感作用というのは、人間が自然の一部であり全てが一つの有機体として繋がっているために、他の箇所で起きた影響を受けることである。⁴⁹ 『公的文書』の著者の説明に従えば、共感作用説というのは、ヴァンパイア側の霊と被害者側の霊の相互交信によって影響を受けたために被害者が死亡したとする説だと考えられる。結局のところ、世界霊説にせよ共感作用説にせよ、人間にはもともと霊というものが備わっており、それが死体に影響を与えているとい

⁴⁷ Vgl. AL, S. 41.

⁴⁸ Vgl. Gloy, Karen: *Das Verständnis der Natur. Erster Band. Die Geschichte des wissenschaftlichen Denkens.* München 1995, S. 61f.

⁴⁹ ヴァンパイアとは異なるが、「ナーハツェラー／後で食る者 (Nachzehrer)」という怪物についても似たようなことが言われている。彼らは死後に墓の中で自らの屍衣や肉を噛んだり食べたりするが、その共感作用によって犠牲者が死に至る。彼らが噛む衣服などは犠牲者の代理であり、ナーハツェラーになった人物と非常に近い関係にある者が犠牲者になるとされる。Vgl. Sturm / Völker, S. 516; 平賀、93-94 頁。

う考えが基本となっていることが読み取れる。それはアストラル霊説についても言うことができる。

『哲学辞典 (Philosophisches Lexicon)』(1726)⁵⁰ のアストラル霊の項を参照してみると、それは人間の中間部分の呼び名であると説明されている。錬金術師として名高いパラケルススの説によれば、人間の体は三つの部分、「魂 (Seele)」、「霊 (Geist)」、「肉体 (Leib)」から構成されているという。これらは人間の死後、もときた場所へ戻っていく。神によって吹き込まれた魂は神のもとへ還る。土と水から成り立つ肉体は土へ還り、最終的には腐敗する。パラケルススは霊のことをアストラル霊、または「星体 (Stern-Leib)」と呼んでいる。これは空気と火の元素からできており、空気に還る。しかし、より純粋な元素からできているため、肉体より腐敗に時間がかかる。また、この元素のうち的一方がもう一方より純粋であれば、その純粋なほうが、より腐敗に時間を必要とするという。このアストラル霊は、「欲望的部分と気概的部分の他に (nebst der facultate concupiscibili & irascibili)」、死に際に「心 (Gemüth)」に刻み込まれた思考、欲求、想像を有する霊であるとパラケルススは言う。アストラル霊は、生前にその人間の心が執着していた場所、とりわけ死の瞬間に印象づけられた事物に現れる。殺された人間の場合、殺人者への怒りや復讐心が心に焼きつく。すると、霊がそれを抱き、あらゆる手段をもって復讐を遂げようとする。霊は殺人の発見を願い、魂のない死体が動いたり血を流したりするという。

この項を見れば一目瞭然であるが、アストラル霊説とは、死の際にアストラル霊にある印象が刻み込まれ、そのために死体から血が流れたり死体が墓から出て歩いたりするという説であると考えることができる。腐敗しない死体についても、火や空気というアストラル霊を形成する元素から説明が可能である。ただ、世界霊説とは異なり、この説には死後になぜ爪や髪が伸びるのかということについて説明できる要素が見当たらない。一方、『公的文書』の著者は、死後の成長に関して、世界霊や霊を通じて栄養が与えられるという考えから説明している。

世界霊ではないにしても、何か死体に残留しているものがあり、それが死後における流血現象や爪などの成長を引き起こすと考えた論者は他にもいたようで、ある君主に雇われていた家庭教師であり神学者のクリストフ・フリードリヒ・デメリウスは、自著の『哲学的試み (Philosophischer Versuch)』(1732)においてアリストテレス主義的世界観を持ち出している。⁵¹ ヴェンパイアに「理性的魂 (anima rationalis)」は見られない。なぜなら、その作用が停止して

⁵⁰ Vgl. *Philosophisches Lexicon, Darinnen Die in allen Theilen der Philosophie, als Logic, Metaphysic, Physic, Pneumatic, Ethic, natürlichen Theologie und Rechts-Gelehrsamkeit wie auch Politic fürkommenden Materien und Kunst-Wörter erklärt und aus der Historie erläutert; die Streitigkeiten der ältern und neuern Philosophen erzehlet, die dahin gehörigen Bücher und Schrifften angeführet, und alles nach Alphabetischer Ordnung vorgestellt werden, Mit nöthigen Registern versehen und herausgegeben von Johann Georg Walch, der Heil. Schrifft Doctor. und P. P. auf der Universität Jena.* Leipzig 1726, Art. „Astral-Geist“, Sp. 129f.

⁵¹ Vgl. Hamberger, S. 167f.

しまっているからである。また、「感覚的魂 (anima sensitivae)」も見られない。なぜなら、彼らの体はもはや感覚を持たないからである。しかし、体が腐らないこと、新鮮な血が体内に流れていることから、「栄養的魂 (anima vegetativae)」は有していると考えられる。デメリウスによれば、このような体は栄養を得るために最も近くにあるものを求め、そのために自らの屍肉や肉を食うのだという。ここで重要なのは、理性的魂が離れたことによる人間としての死と、栄養的魂が存在する限り、肉体全てが完全に分解されない限り続く、物質的な生の違いが明らかにされていることである。『公的文書』では肉体に残存するのは霊だとされるが、この人間としての死と物質的な生の違いに関しては全く同じである。世界霊から霊を通して与えられる栄養が肉体を生かし続けるのである。

これに対し、『公的文書』への反論を書いたゴットロープ・ハインリヒ・フォークトは世界霊の存在を否定し、ヴァンパイア事件は毒によって引き起こされたものであると説明している。⁵² コトヴィッツの手紙で報告されている蘇ったハイドックは、毒のために妻が見た幻覚であり、手足のない赤ん坊は母親の体内にあった毒のためにそうなったのだという。死体が腐敗しないことも彼は毒に原因を求めており、新しい皮膚が生えてくることについては蛇の脱皮を例に出して自然なことであると結論づけている。また、感染によってヴァンパイアが増える点については狂犬病を例に取り、毒が引き起こした狂乱状態が原因であると主張する。狂犬病にかかった犬に噛まれた人間が他の人間を襲い毒が感染していくという経過に、ヴァンパイアの増殖をなぞらえているのである。

毒とは少し異なるが、『ユダヤ人の手紙』でヴァンパイア問題を取りあげたダルジャン侯は、ヴァンパイア事件の原因は、病気による幻覚、妄想であるとみなしている。⁵³ 彼はフリュッキンガーの報告書にある被害者シュタノスカの話に触れる。ある晩、物音で目覚めると、あるハイドックの死んだはずの息子が自分を絞め殺そうとしていたと彼女は証言し、その三日後に衰弱して死亡したという。ダルジャン侯の説は恐怖が引き起こす心理的影響に重きを置いており、ヴァンパイアに襲われたという「非常に活発になされた想像 (eine sehr rege gemachte Einbildung)」が彼女に大きく影響したために死亡したと彼は考える。少しでも体の不調を感じると、人はすぐに伝染病にかかったと思い込むと彼は言う。人々は病気によってヴァンパイア

⁵² Vgl. Vogt, Gottlob Heinrich: *Kurtzes Bedencken von denen acten-mäßigen Relationen wegen derer Vampiren, oder Menschen- und Vieh-Aussaugern, ingleichen über das davon in Leipzig herausgekommene Raisonement vom Welt-Geiste, an gute Freunde gesandt von Gottlob Heinrich Vogt, Medic. Pract. Leipzig 1732, S. 4ff.; Harenberg, Johann Christoph: Vernünftige und Christliche Gedanken über die Vampirs oder Bluhtsaugende Todten, so unter den Türcken und auf den Gränzen des Servien-Landes den lebenden Menschen und Viehe das Bluht aussaugen sollen, begleitet mit allerley theologischen, philosophischen und historischen aus dem Reiche der Geister hergeholten Anmerkungen und entworfen von Johann Christoph Harenberg, Rect. der Stifts-Schule zu Gandersheim. Wolfenbüttel 1733, S. 16.*

⁵³ Vgl. Hamberger, S. 218ff.; Sturm / Völker, S. 471ff.; 種村、100-101頁。

という幻覚を見ると同時に、思い込みによる恐怖で死亡するのである。ダルジャン候もフォークトと同じく、霊などに原因を帰することはしない。土壌の性質によっては死体が腐敗しないこともあると述べ、死後の髪や爪の成長は体に水分が残っていると起こることがあると主張している。⁵⁴

オーストリアの宮廷医師であったヘラルト・ファン・スウィーテン⁵⁵ もダルジャン候と同じく、腐敗しない死体は全くありえないことではないと述べている。彼によれば、棺が完全に密閉状態にあるか、墓土の密度が極めて高いか、空気が冷たいか、何らかの理由で外気の侵入が防がれている場合、死体は腐敗しないか、もしくは極めて緩慢に腐敗するという。死体が腐敗するのに必要とする時間は、土壌の性質や空気の寒暖、死者がかかっていた病気などで変化するからである。またスウィーテンは、ヴァンパイアの手にかかって死んだとされる被害者の死因を心理的影響に求めている点でも、ダルジャン候と意見を同じくしている。⁵⁶

『公的文書』やデメリウスなどの理論は、フォークトやダルジャン候、スウィーテンの理論と明らかに毛色が異なる。前者は生氣論的、後者は機械論的である。『公的文書』の著者は、その伝統をストア派にまで遡ることのできる物質的な霊から腐敗しない死体や流血現象を説明しようとした。一方でダルジャン候は、土壌の状態から死体が腐敗しなかったのだと考え、死体の流血現象を土壌に含まれる硝石や硫黄から化学的に解明しようとしている。このように、ヴァンパイアをめぐる 1730 年代の議論は非常に多様な視座からなされていたのである。

4. 終わりに — 議論の対象から文学の対象へ

以上、確認してきたように、1730 年代にはプロゴヨヴィッツとパウルという「ヴァンパイア」が引き起こした事件、ひいてはヴァンパイアという存在そのものについて様々な議論がなされた。ヴァンパイア事件への注目度が大きかった理由として、やはり一般的な理解では死者は蘇るものではないということが挙げられるであろう。17 世紀末から少しずつ芽を出し始めた蘇る死者についての議論は、フロムバルトやグラーザー、フリュッキンガーの報告書を経て大きく花開いた。現地に赴き調査に取り組んだ医師や軍人などの教養者層は、彼らの常として辺境の非教養者層の言を迷信として頭から疑ってかかったであろうが、それ以上に腐敗しない死体という人知を超えた現象に対する驚きがあったのである。だからこそ、ヴァンパイアという未知なる存在は解明されなくてはならなかったといえる。死後の流血や、髪や爪の成長も、突き詰めていけばヴァンパイアがなぜ死後に動くのか、ヴァンパイアは死んでいるのか生きているのか

⁵⁴ Vgl. Hamberger, S. 220f.; Sturm / Völker, S. 474f.

⁵⁵ ブールハーフェの弟子にあたる人物で、ウィーン大学医学部改革のためにマリア・テレジアに招聘される。また彼女の侍医も務めた。1749 年には医学部長の座に就任し、ウィーン学派を盛り立てた。梶田、235 頁；エックルト、208–209 頁参照。

⁵⁶ Vgl. Hamberger, S. 252; 種村、93–96、100–101 頁。

かという問題を中心としているのである。つまり、ヴァンパイアを取り巻く全ての興味は死後に人間がどうなるのかという根源的な疑問に通じていると言ってよいだろう。

こうした話は現代においても医学だけで語られることはない。超自然的・宗教的・精神的な観点もまた顔を出してくる。そうであるからこそ、18世紀においても『公的文書』の著者に見られるような生気論的な考えが現れることになる。宗教や医学、哲学といった人間の営みは、人間の生と死、魂や精神のありかなどをめぐる疑問に根づいている。そのためにヴァンパイア事件に関する議論も多様で複雑にならざるをえない。学問の諸領域が現在ほどはっきりと区別されていない時代という事情もあるかもしれないが、『公的文書』の著者の論はそれを端的に示す好例であるといえよう。ヴァンパイアは生きながらにして死んでいるというその特性のため、必然的に生と死に関する問題を孕む。でなければ、これほどにヴァンパイア事件が取り沙汰されることはなかっただろう。

とはいえ、18世紀末になると次第にヴァンパイア事件に関する議論は下火になっていく。⁵⁷ それと入れ替わるようにして、19世紀には文学の世界でヴァンパイアが幅を利かせ始める。そこには一体どのような関係性があるのだろうか。この問いに一朝一夕で答えることは確かに難しいが、一応の推論を立ててみることはできる。

1755年3月1日に、ウィーンでヴァンパイアに関する法令が出された。⁵⁸ ここには「ヴァンパイア」という直接的な名詞こそ登場しないものの、「死後の魔術 (Magia posthuma)」という単語が用いられている。条文では、まず当時の現状について触れられている。人々は「軽信 (Leichtgläubigkeit)」から自分の想像や夢、あるいは詐欺師によって本物だと思い込まされたものを「幽霊や魔法 (Gespenster und Hexerei)」だとみなしたり、何かに取り憑かれていると称する人間を信じたりする。しかし、それだけではなく、偏見を持つ聖職者によって彼らの考えは強められているという。条文ではその最近の例として、モラヴィアで「死後の魔術」を口実に聖職者によって墓から死体が掘り起こされ、そのうち数体が燃やされた事件が挙げられている。このため、政府の介入なしにこうした現象を聖職者が処理することを、法令で禁じるというのである。また、もし幽霊や魔法⁵⁹ に関する事件、墓荒らし、あるいは悪魔憑きなどの事件が起きたらすぐに担当庁に知らせるようにとも明記されている。

⁵⁷ Vgl. Hamberger, S. 8.

⁵⁸ Vgl. *Sammlung aller k. k. Verordnungen und Gesetze vom Jahre 1740. bis 1780., die unter der Regierung des Kaisers Joseph des II. theils noch ganz bestehen, theils zum Theile abgeändert sind, als ein Hilfs- und Ergänzungsbuch zu dem Handbuche aller unter der Regierung des Kaisers Joseph des II. Für die k. k. Erbländer ergangenen Verordnungen und Gesetze in einer chronologischen Ordnung.* Dritter Band. Wien 1786, S. 172f.

⁵⁹ 当時、死後にヴァンパイアになると考えられた人間として、犯罪者、非嫡出子、イスラム教に改宗したキリスト教徒、罪を犯した司祭、破門者、臨終の秘跡を受けられなかった者の他に、生前に魔法と関わった者が挙げられる。Vgl. Sturm / Völker, S. 523. こうした事情からも、条文で魔法についての言及があるのだと思われる。

このように、ヴァンパイアに限らず悪魔や魔法といった存在は全てまやかであり、信ずるに値しないものであるという立場に 18 世紀半ばのウィーン政府は立った。裏を返せば、法令を出す必要に迫られるほどに大衆はこうしたものを信じたと言えるが、行政の対応や機械論的観点に立つ論文などによって、18 世紀を通じて徐々にこの信仰が弱まっていったのではないだろうか。その一方で、ポリドリによって書かれ、バイロンの名を冠した『ヴァンパイア』においてヴァンパイア文学は花開く。それ以前の英文学においても、サミュエル・テイラー・コールリッジの『クリスタベル(Christabel)』(1798/1800)とロバート・サウジーの『破壊者タラバ(Thalaba the Destroyer)』(1801)にヴァンパイアのモチーフが現れていることは示唆に富む。啓蒙主義や合理主義によって学問の世界から追い出された後、イギリスのロマン主義がヴァンパイアの受け皿になったのである。啓蒙主義とロマン主義の二項対立という観点は少しばかり単純化されすぎているかもしれないが、18 世紀から 19 世紀にかけてヴァンパイアが住処を移した原因を、ここに探ることは決して見当違いではないだろう。20 世紀にヴァンパイアが映画の世界に入ってきたように、19 世紀においてヴァンパイアは、文学の世界に本格的に進出していったのである。

Warum verwesen Vampire nicht?

— Die deutschsprachigen Theorien über Vampire in den 1730er Jahren —

MORIGUCHI Daichi

In den Jahren 1725 und 1732 geschahen im Grenzgebiet zwischen Europa und dem Osmanischen Reich entsetzliche Begebenheiten, die als Anzeichen von Vampirismus interpretiert wurden. Es war das erste Mal, dass Vampire nicht nur als Motiv in Volkserzählungen, sondern als ein für real gehaltenes Phänomen die Bühne der Geschichte betraten. Die Namen der angeblichen Vampire waren Peter Plogojowitz und Arnold Paul. Die Bewohner zweier kleiner Dörfer im Serbien, Kisolowa und Medwegya, klagten, sie würden von diesen schon vor einer Weile verstorbenen Männern vampirisch heimgesucht. Die beiden Fälle wurden durch ein Schreiben des Kameralprovisors Frombald und die Berichte zweier Militärärzte namens Glaser und Flückinger bekannt gemacht und machten bald in akademischen wie in militärischen Kreisen die Runde. Diese ominösen Nachrichten entzündeten hitzige Diskussionen über die Möglichkeit, dass Tote wieder aus den Gräbern zurückkommen könnten, um Menschen anzugreifen und ihnen das Blut auszusaugen.

Obwohl besonderes in den 1730er Jahren viele Abhandlungen publiziert wurden, die diese Fälle behandeln, hat die Forschung sie bislang weitgehend ignoriert. Eine Ausnahme ist Klaus Hamberger, der eine große Zahl der damaligen Vampirtraktate und akademischen Briefe um die Vampirfälle zusammengetragen und ediert hat. Allerdings beschäftigt er sich mit ihnen hauptsächlich aus medizinischem Interesse und unter der Fragestellung, warum der Vampirismus damals so starke Aufmerksamkeit der Gelehrten auf sich lenken konnte. Doch kann man das Problem auch aus verschiedenen anderen Blickwinkeln betrachten, z.B. aus militärischen, religiösen oder philosophischen.

Den Berichten von Glaser und Flückinger zufolge drohten die Dorfbewohner mit dem Auszug aus dem Dorf, wenn sie nicht die Erlaubnis des Hofkriegsrats bekämen, die Gräber der als Vampire verdächtigen Leichname zu öffnen und diese unschädlich zu machen. Ein solcher Auszug wäre für die Habsburgermonarchie äußerst ungünstig gewesen, da während des Krieges mit dem Osmanischen Reich der Schutz der Grenzen fast gänzlich abhängig von

den Grenzbewohnern war. Für Theologen hingegen musste das Rätsel der Vampire gelöst werden, weil ein Umgehen von Toten oder Geistern in dieser Welt der christlichen Lehre widersprach. Zudem ist das Vampirphänomen, worauf schon Hamberger hinwies, eng mit dem traditionellen Leib-Seele-Problem in der Philosophie verknüpft.

In der vorliegenden Arbeit werden diese unterschiedlichen Sichtweisen der angeblich vampirischen Begebenheiten diskutiert, und zwar anhand der Abhandlung eines anonymen Verfassers, die im Jahr 1732 veröffentlicht wurde. Seine Theorie des „Welt-Geistes“ versucht zu erklären, warum nach der Scheidung der Seele vom Körper der Leichnam nicht in Verwesung übergeht und sogar Haare, Nägel und Haut noch weiter wachsen. Der Autor zieht einerseits Zitate aus der Bibel heran und zum anderen Zitate neuzeitlicher Alchemisten. Dabei schließt er sich der traditionellen Theorie an, dass der Mensch aus Leib, Geist und Seele bestehe, und behauptet, dass nach dem Tod die Seele zu Gott zurückkehre, während der Geist noch im Körper verbleibe und so die Ursache der Unverweslichkeit sein könne. Der individuelle Geist stamme vom Welt-Geist ab und werde von ihm nutriert. Außerdem verwandle sich der Geist in das menschliche Blut. Diese Denkweise erinnert an die griechischen Pneumatiker, die das Pneuma (Geist/Spiritus) für etwas Materielles hielten. Zudem weist der Begriff des Welt-Geistes auch Ähnlichkeiten mit dem der Weltseele in Platons Werk *Timaios* auf. Das alles zeigt die vielfältigen Aspekte der Theorie des Autors.

Man sollte diese Abhandlung nicht einfach damit abtun, dass die damalige Wissenschaft noch nicht den heutigen Standard erreicht hatte. Die Vielfalt der in ihr berührten Gesichtspunkte macht vielmehr deutlich, dass es bei dem Diskurs über Vampire immer um den grundlegenden Zusammenhang von Leben und Tod geht. Der anonyme Autor vertritt die Position des Vitalismus und setzt sich damit von anderen zeitgenössischen mechanistischen Aufsätzen über das Vampirphänomen ab, wie z.B. denen von d'Argens oder van Swieten, die die Unverweslichkeit der Leichname der besonderen Beschaffenheit der Erde zuschrieben, in der die Toten bestattet wurden. Der Konflikt zwischen Vitalismus und Mechanizismus ist auch in der Gegenwart noch nicht verstummt, wie die anhaltende Diskussion über die Möglichkeit oder Unmöglichkeit eines Lebens nach dem Tode beweist. Die Furcht davor, was mit uns nach unserem Tod geschieht, ist ein existenzielles Problem der *conditio humana*, und findet so natürlich auch Eingang in die Wissenschaften. Daher mussten die Vampirtraktate unter verschiedenen Gesichtspunkten geschrieben werden, wofür die Abhandlung des anonymen Verfassers ein gutes Beispiel ist.